

見た目と症状から考える!!

臨床でよく見る

皮膚の異常

皮膚は、その状態の変化によって、身体の異変をさまざまなかたちで伝えています。

本特集では、特に「見た目の変化」を伴う皮膚の疾患を取り上げ、
臨床でのアセスメント・判断に役立てられるポイントを解説しました!



【執筆】二村 恭子 ふたむら・きょうこ

藤田医科大学ばんだね病院 総合アレルギー科 講師

三重大学医学部医学科卒業。2年間の臨床研修を経て名古屋大学医学部皮膚科学教室に入局。一般病院皮膚科勤務の後に名古屋大学大学院医学系研究科に入学、アレルギー疾患の病態研究のため国立成育医療センター研究所免疫アレルギー・感染研究部に国内留学。学位取得により大学院医学博士課程修了後に、同研究所免疫アレルギー・感染研究部研究員となり基礎研究に従事。2018年藤田保健衛生大学坂文種報徳會病院総合アレルギー科客員講師、2019年より現職。専門分野は皮膚科一般、皮膚アレルギー疾患、免疫学。

Contents

- Part 1** 皮膚が赤く、かゆみがある疾患①(皮膚の手触りに変化があるもの) p.74
- Part 2** 皮膚が赤く、かゆみがある疾患②(皮膚の手触りの変化がない・少ないもの) p.79
- Part 3** 皮膚が赤く、痛みがある疾患 p.83
- Part 4** 皮膚が赤に近い色(紫・茶・黒)の疾患 p.87
- Part 5** 皮膚がその他の色(黄・白・青・緑)の疾患 p.91

はじめに

～ナースが皮膚を見るにあたって～

みなさんは、「皮膚」にどのようなイメージをもっていますか？ あまりピンとこないかもしれませんが、「皮膚」はヒトの「臓器」の1つです。体の表面を覆って外力や水分などの物理的、あるいは化学的刺激を防いだり、細菌やウイルスなどの病原体を体内に侵入させないなどの防御機能はもちろん、血液やリンパ液、他の臓器や筋肉などを保護して体外に出さない保持機能、他にもカルシウム代謝に欠かせないビタミンDの生成に関与する内分泌機能など、多くの役割をもっているのです。

では、臓器としての「皮膚」が、他の臓器と大きく違うところはどこでしょうか。それは「**目で見たことができる**」という点だと私は考えています。目で見えない内臓の疾患とは異なり、「皮膚」の疾患による変化(皮疹)は表面に現れ、視覚や触覚で評価することが可能です。どのような皮疹が、体のどの部位や範囲に、どれくらいの密度で発生しているかを把握することで、どのような皮膚疾患に罹患しているのか、診断を進めていくことができます。

皮疹を見るポイントで重要な要素の1つとして、真っ先に挙げられるのは「色」です。皮膚の色調の変化は、そこで起こっている病態を必ず反映しています。そこで本稿では臨床でよく見る皮膚疾患をいくつか挙げ、その色調の原因や病態、診断や治療法などについて紹介します。皮膚疾患は多数あり、今回はごく一部の紹介となりますが、知識として見たことがあるかないかでは、大きな違いがあります。

ナースのみなさんには、**皮疹の色調**はもちろん、**形態や分布、随伴症状(特に痛みやかゆみ、発熱など)**の評価や、**患者さんから皮疹の経過を聴取**することなどを念頭に置いて、皮膚を見てほしいと思います。そして診断後には、外用治療やスキンケアなどについて適切なケアプランを立案・実施してもらえればと思います。

最後になりますが、本特集にあたって貴重な臨床写真を提供いただきました藤田医科大学ばんたね病院総合アレルギー科の矢上晶子先生、鈴木加余子先生に深謝申し上げます。

二村恭子

【画像提供協力】

矢上晶子(藤田医科大学ばんたね病院 総合アレルギー科 教授)

鈴木加余子(藤田医科大学ばんたね病院 総合アレルギー科 准教授)